

- 4 ブリュドモオについては、二七一ページを見よ。
 5 『知られざる革命、一九一七—一九二一年』（一九四七年）からの抜萃。この書は、出版者とヴォーリンの家族の無報酬の許可によって、一九六九年にビニール・ベルフォン社から再版された。（邦訳名は、第二部が「一九一七年・裏切られた革命」、第三部が「知られざる革命」ともに現代思潮社、野田茂徳・千香子訳。第一部は未訳）
 6 ヴォーリンの証言。『知られざる革命』への未刊の《結論》からの抜萃。
 7 われわれはロシアで、そしてちにフランスで知り合っていた。彼は、私のように、一九一六年に、フランスから追

- 放された。（ヴォーリン注）
 8 見出しは編者による。
 9 Ugo Fedeli (1898—1964) ウーゴ・トレーニとも署名していたイタリアのアナキスト、マテスタの弟子、一九四五年までイタリアから国外追放されていた。カミロ・ベルネリ（一九〇ページを見よ）の同郷人で協力者、一九三六年に反ファシスト・スペインのために尽くし、ベルネリとともに新聞「階級戦争」を編集した。イタリアへ帰ると、歴史的な諸著作を発表した。
 10 デニキン、I 卷二二四ページを見よ。

ネストル・マフノー 1889—1935

ネストル・マフノー、アナキスト・ゲリラ

十月革命の直後、貧農の子で、ネストル・マフノーと名乗る、若いアナキストが、南ウクライナの農民大衆を、自治的な形で、社会的にも軍事的にも、率先して組織した。すべては、ドイツとオーストリアの占領軍の圧力で、右翼の制度がウクライナにおいて樹立されたことから始まった。それは、革命的な農民が奪い取ったばかりの土地を、旧地主たちに急いで返却したのである。土地労働者たちは、彼らの真新しいあらゆる獲得物を、武器を手にして防衛した。彼らはまたそれを、反動に対してとともに、農村における、ポリシエヴィキ人民委員の、機宜を失した無理な割込みと、そのあまりにも重い徴発に対しても、防衛した。

このゲリラの両面での大規模な暴動は、一人の理非曲直を明示するもの、農民たちから、親父マフノーと渾名されていた、一種のアナキスト・ロビンフッドによって動かされていた。十

一月十一日の休戦は、ドイツ・オーストリア占領軍の撤退をもたらし、それは同時に、マフノーに、武器と物資の貯蔵を行なう唯一の機会を与えた。

マフノー運動の諸大会は、農民の代表と戦闘員の代表とを集めていた。事実、非軍事組織も、農民反乱軍の延長であって、ゲリラの戦術を用いていた。反乱軍は、驚くべきほど動的で、単にその騎兵の行動によってのみではなく、馬に曳かれるスプリング付きの軽車両で移動する歩兵によっても、日に百キロも踏破することができた。この軍隊は、特に絶対自由主義的な、志願兵制の、あらゆる段階で実施されている選挙の原則の、自由に同意された規律の、基礎の上に組織されていた。その規律の諸規則は、バルチザンの諸委員会で練られ、ついで総会によって効力を認められ、全員によって厳格に守られていた。

「一九一九年秋に、デニキンの反革命軍を絶滅させた名譽は、主としてアナキスト反乱分子のものであった」と、マフノー運動の記録者ビョートル・アルシーノフは書いている。

しかし、マフノーは、彼の軍隊を、赤軍司令官トロツキーの

指揮下におくことを承知しなかった。ポリシエヴィキたちは、十八年後、スペインのスターリン主義者たちがアナキスト旅団に対して真似ることとなる手続きを開始し、マフノーのバルチザンに武器の供与を拒絶した。彼らは、「真切切っている」、白衛軍から攻撃されるままになっている、と非難するために、バルチザンを援けねばならぬ義務を怠ったのである。

しかしながら、二度にわたって、マフノー軍と赤軍は和解している。それは、干渉主義の危険の重大性のために共同行動が必要となった時にあって、まず一九一九年五月デニキンに対して、ついで、最終的にはマフノーが粉砕したウランゲリの白衛軍が迫ってきた時、一九二〇年の夏から秋にかけてのことであつた。しかし、極度の危険が去るや否や、赤軍はマフノーのゲリラに対して軍事作戦を再開し、マフノー側も反撃した。

一九二〇年十一月の末、ポリシエヴィキ権力は畏をしかけるのをためらわなかった。クリミヤのマフノー軍の將校たちは、ある軍事会議に参加するように招待された。彼らはそこで政治警察、チェーカーによってたちまち逮捕され、何らの裁判もなしに銃殺されるか、武装解除された。同時に、定石通りの攻撃がバルチザンに対して強行された。絶対自由主義者と「權威主義者」との——次第に戦力格差の開いていった闘争——、古典的な軍隊とゲリラとの闘争は、さらに九カ月つづく。最後には、数的に圧倒的に優勢な、そして装備も優れている赤軍によって戦闘力を奪われ、マフノーは祖国を捨てねばならなかった。彼は、一九二二年八月、ルーマニアに亡命することに成功し、ついでパリに到着した。そこで、ずつとのち、一九三五年七月に、彼は病氣と赤貧のうちに死ぬこととなった。

ビョートル・アルシーノフとともに、人はマフノー運動の中

ウイア人の銃手が巡回していた。私は彼の脇を通り、中庭に入り、そこで私は、別の歩哨にぶつかり、行きたい建物を教えてくれるよう頼んだ。それから先は、散歩するのも、ビョートル大帝以前の、あるいは以後の、さまざまな口径の大砲や砲弾を眺めるのも、ツァーの鐘（記念鐘）やよく知られたほかの名物の前でたえずむの、あるいは宮殿の一つを直接訪れるのも、自由であつた。私は左に曲り、宮殿の一つの中に飛び込んだ（私はその名を忘れた）。三階までであつたと思うが、私は階段を登り、誰にも会うことなく長い廊下を大股で歩いた。扉にかけられた札は、「党中央委員会」、あるいは「図書室」と読まれた。しかし、どちらにも用のなかつた私は、歩きつづけた。それらの扉の中に誰がいるのか、もとよりはっきりしなかつた。

ほかの札には、どれも名称が書いてなかつた。私はもと来た方に引き返し、「党中央委員会」という札の前で立ちどまった。私は扉を叩いた。「お入り」と答えがあつた。事務所の中には、三人の人が坐つていた。それらの一人は、私が二、三日前、ポリシエヴィキのクラブの一つで会つた、ザゴルスキだと思われた。私はその人々に話しかけたが、彼らは死のような沈黙の中で、何事かに心を奪われていて、私にどこに中央執行委員会の事務所があるか告げなかつた。

三人のうちの一人（私の間違いでなければ、ブハーリシ）が折カパンを腕にかかえて起ち上がり、同僚たち

に、農民大衆の独立運動の原型を見ることができると同時に、それを、ゲリラの革命戦争、二十世紀のそれ、中国人の、キューバ人の、アルジェリア人の、英雄的なヴェトナムのそれの、前ぶれと見なすこともできるのである。

クレムリンを訪問中のマフノー

一九一八年六月、マフノーは、ウクライナの農民の間で成就すべき、革命的絶対自由主義的な仕事の方法と傾向について、何人かのアナキスト活動家に相談するために、モスクワにいった。彼はそれを利用して、クレムリンを訪れ、当時ポリシエヴィキ党中央委員会書記の、ヤコブ・ミハイロヴィッチ・スヴェルドロフに、それからレーニン自身に会つた。以下は、まだ未刊の回想録の中でマフノーによって物語られている二つの対談である。（以下の記録を読むには、革命ロシアは、ブレスト・リトフスク条約で、ドイツの要求によりウクライナを放棄していた事実を、念頭に入れておく必要がある——訳者）

スヴェルドロフとの私の会話

私は、レーニンに、できればスヴェルドロフに会うのだ、そして彼らと話をするのだという気持で、クレムリンの門前に着いた。くぐり戸のかげに、当直の男が坐つていた。私は彼に、モスクワのソヴェトから交付された証明書を差した。それを注意深く読んだ彼は、通行証を作り、それを彼自身で私の証明書に取付けた。私はクレムリンの内部に向かう玄関を入つた。そこにはラト

に、しかし私にも聞こえたほどの声でいった。「ちよつと待っていてくれ。この同志に——と顎で私を指しながら——中央執行委員会の事務所を連れてくる」。彼は扉に向かつた。私は、そこにいた人々に謝し、私にはブハーリンと思われる人物とともに部屋を出た。廊下には依然として墓場のような沈黙が支配していた。

私の案内人は、どこから来たのかたずねた。「ウクライナから」と私は答えた。彼はそこで、ウクライナを犠牲としているテロルについてたぐさんの質問を私に浴びせ、私がどうしてモスクワに来ることができたか、知りたがつた。階段の所で、会話をつづけるためにわれわれは立ち止まった。そして最後に、私の臨時の案内人は、廊下の入口の右手の扉を指し示した。彼によれば、私はそこで、必要とする情報を得られるはずであつた。握手をしてから彼は、階段をまた降りて、宮殿から出ていった。

私は教えられた扉へ行つた。叩き、そして入つた。若い娘が、私は何をしたのかを聞いた。

「労働者・農民・兵士・コサック騎兵代表ソヴェトの執行委員会議長、同志スヴェルドロフに会いたい」と私は答えた。

何もいわずに、若い娘は机のうしろに坐り、私の証明書と通行証を受けとり、それらをざつと調べ、何文字かを控え、別の通行証を私にくれた。それには、私のゆくべき事務所番号が示されていた。

若い娘が送ってきてくれた事務所の中で、私は、中央執行委員会の書記、太った、身だしなみのよい、しかしひどく疲れた様子の男に会った。彼は私のしたいことをたずねた。私はそれを彼に説明した。彼は、私に証明書類を求めた。私はそれらを渡した。それが、彼の関心を惹いた。彼は、私に質問した。

「それじゃ、同志、あなたは南ロシアから着いたのですか？」

「そうです。私はウクライナからきました」と、私は答えた。

「あなたはすでに、ケレンスキーの時代の革命防衛委員会の議長だったのですか？」

「そうです」

「では、あなたは社会革命党员ですか？」

「いいえ！」

「あなたは、あなたの地方の共産党と、どんな関係を持っているのですか、あるいは持っていたのですか？」

「私は、ポリシエウイキ党の多くの活動家と個人的な関係があります」と、私は答えた。そして私は、アレクサンドロフスキの革命委員会議長、同志ミハイロヴィッチの名や、エカチェリノスラフのほかのいく人かの活動家の名をあげた。

書記は、しばらく黙った。それから、「南ロシア」の農民の精神状態について、ドイツ軍や中央ラーダの兵士に対する彼らの行動について、ソヴェト権力への彼らの

態度、等々について、私に質問した。

私はいくつか彼に簡潔に答えた。それは、明らかに彼を満足させた。個人的には、私はそれ以上詳しく述べることができないうのが残念であった。

それから、彼はどこか私の知らぬ所に電話した。そしてすぐに、同志スヴェルドロフは、中央執行委員会議長の部屋にいくよう、私を招いた。

そこにゆきながら私は、反革命派によって、また、レニン、スヴェルドロフ、トロツキーの政敵である革命派や、それに私自身の友人たちによっても吹聴されている噂、つまり、彼ら地上の神々に近づくのは不可能だという噂を、思いだしていた。彼らは、警備兵に囲まれていて、その長は指導者お気に入り訪問者しか通さない、と人々は聞いていたのである。

今、中央執行委員会のたった一人の書記に伴われながら、私は、そうした風説のばかばかしさを考えていた。スヴェルドロフは、微笑しつつ、彼自身でわれわれのために扉を開いた。私には彼が友愛をたたえているように見え、彼は手を差し伸べ、そして私を脇掛け椅子に導いた。それから、中央執行委員会の書記は、彼の事務室に戻った。

同志スヴェルドロフは、彼の書記よりもずっと恰幅がよいように私には見えた。また、最近二、三カ月間にウクライナで起こっていることについても、ずっと関心を寄せている印象を私に与えた。彼は私にいきなりいっ

た。

「同志よ、あなたは動乱の只中の南から着いた。あなたはあちらでどんな仕事をしているのかね？」

「ウクライナ農村の革命的な多数の大衆がなしとげたものと同じことです。彼らは、革命に積極的に参加したのち、彼らの完全な解放を獲得することを試みました。彼らの戦列の中で、私はいつもその先頭に立って進んだ、といいえます。今、ウクライナ革命戦線の後退のあとで、私は一時的にモスクワにきています」

「何をいうのかね、同志よ」同志スヴェルドロフは私をさえぎりながら叫び声をあげた。「南の農民たちは、大半は富農か中央ラーダの支持者だ」

私は爆笑した。そして、詳細になりすぎないように、しかし要点にもとづいて、私は彼に、グリヤイ・ポールの地方の、アナキストによって組織された農民たちの、オーストリア・ドイツ占領軍と中央ラーダの兵士に対する行動を話した。

おそらく動揺した同志スヴェルドロフは、しかしくり返していうのを止めなかった。「ではなぜ、彼らはわが赤衛軍を助けなかったのか。われわれの情報によると、南の農民たちは、ウクライナの悪い排外主義に伝染されている。どこでも彼らは、ドイツ軍とラーダの兵士を、有頂天になって、解放者として迎えていた」

神経にさわるものを感じた私は、ウクライナの農村に對するのズヴェルドロフの知識に熱心に反論し始めた。

私は彼に、ドイツ軍やラーダに対する革命的な闘いを進めていた、農民志願兵のたくさん部隊の、組織者であり指導者が、私自身であること、そして私が、農民たちは闘うための強力な軍隊を、彼ら自身の中で徵募できること、しかし彼らは、革命の戦線を明確には理解していないこと、を打ち明けた。装甲列車によって、決して遠くに離れることなく鉄道線路に沿って闘った赤衛軍の部隊は、多くの場合、自分たちの兵士を再び乗車させることを考えもせず、最初の失敗で後退し、敵がそれだけ前進するにせよしないにせよ、敵に十キロ余りを引き渡した。そうした部隊は、自分らの村に孤立し、武器を失って、革命の死刑執行人たちの思いのままであった農民たちに、信頼を与えていない、と私はいった。実際、赤衛軍の装甲列車は、武器を与えるのみならず、農民たちを發奮させ、彼ら自身行動に参加しながら、革命の敵に対する大胆な襲撃へと彼らを促すために、十ないし二十キロ半径以内にある村々に、分遣隊を派遣することも決してなかった。

スヴェルドロフは、注意深く私の話を聞いていた。そして、時々、「そんなことがありうるか」とびくびくりした叫びをあげていた。私は彼に、ボグダーノフ、シウイススキ、サブリンその他のグループに属する、赤衛軍のたくさん部隊を例にあげていった。私は彼に、素早く攻撃にできることもでき、また多くの場合退却することもできる、装甲列車によって鉄道を守る責任を負っていた

赤衛軍は、農民大衆に信頼を与えることができなかつたことを、ひどく冷静に指摘した。ところで、それら大衆は、革命の中に、大地主や富農のみならず、彼らの雇われ人どもの圧制を清算し、国家官僚の政治的行政的権力から逃れる手段を見ていて、その時以来、自衛し、プロシアのユンカーやコサックの首長「スコロバドスキー」の軍の、略式処刑や大規模な破壊に対して自分たちの獲得物を守ろうと準備をととのえていたのである。

「いかに」と、スヴェルドロフはいった。「赤衛軍に關することであたがいのほもつともなことだ、と私は思う……。しかし、われわれはそれを、今では赤軍の中に再編制した。赤軍は力を強めつつある。もしあなたのいうように、南の農民たちが、そうした革命的な飛躍に活気づけられているなら、ドイツ軍が完全に撃破され、コサック首長がごく近いうちに倒されるための、大きなチャンスがある。そこで、ソヴェト権力は、ウクライナでもやはり勝利を収めることだろう」

「それは、ウクライナでこれから進められる地下運動にかかっています。私としては、その行動は、それが組織され、それに闘争の形態が与えられるなら、今日ではかつてないほどに必要だと考えます。それは、ドイツ軍やコサック首長に対して、町でも農村でも、公然と反乱するような大衆を促すものとなりましょう。ウクライナ内部における、本質的に革命的な性格の蜂起がなければ、ドイツ軍やオーストリア軍にこの国から撤退を強いること

もできないでしょうし、コサック首長や彼を支持する連中を捕えることも、その保護者たちともども、彼らに逃亡を強いることもできないでしょう。ブレスト・リトフスク条約と、われわれの革命が外国に対して考慮しなければならぬ政治的要素のために、赤軍の攻撃は想像もできないことだ、ということを忘れないで下さい」

そうしたことを私が話している間、同志スヴェルドロフはノートをとっていた。

「今の場合、私は完全にあなたの見方に同意する」と、彼はいった。「しかし、あなたは何者なんだ。共産党員か左翼の社会革命党員なのか？ あなたが話している言葉で、あなたがウクライナ人だ、ということはよくわかる。しかし、二つの党のどちらにあなたが属しているのか、人にはわからないね」

この質問は、私を動揺させることなく（中央執行委員会の書記が、すでにそれを私に聞いている）、私を窮地に陥れた。どうすべきか？ 私はアナキストだ、彼の党やそれによって作られた国家主義的の制度が、モスクワやその他の沢山の都市で二カ月以上も前に粉砕した人々の同志であり友だ、とスヴェルドロフにはつきりいへば、それともほかの旗の下に身を隠すべきか？

私は当惑していた。スヴェルドロフはそれに気づいた。われわれの対話の最中に、社会革命についての私の観念や私の政治的所属を明らかにすること、私はそれを望まなかつた。それらを隠すこともまた私を嫌悪させ

た。それで私は、数秒の熟慮ののち、スヴェルドロフにこういった。

「なぜあなたは、それほど私の政治的所屬に関心を持たれるのですか？ 私が誰でありどこからきたかを示すあなたにお見せした証明書、都市や農村の労働者たちを、また同時に、ウクライナで猛威をふるっている反革命軍と闘うために志願兵の部隊やベルチザンの部隊を、組織するために私がある地方で果たした役割、あなたにはそれでは十分ではないのでしょうか？」

同志スヴェルドロフは謝罪した。そして、彼の革命的な敬意を疑わないように、あるいは、私への信頼がかけられていると彼を思わぬように、と私に懇請した。彼の謝罪は、私が間が悪く感じられたほど、誠実なものに私には見えた。私は、それ以上ためらうことなく、私はバック・ニン・クロボトキン流の無政府共産主義者だ、と彼に名乗った。

「あなたは何という無政府共産主義者だろう、同志よ。だって、あなたは、動労大衆の組織と資本の権力に対する闘いの中でのその指導を認めているじゃないか」とスヴェルドロフは、友愛に満ちた微笑をたたえて叫んだ。彼の驚きを見て、私は中央執行委員会議長に答えた。

「アナキズムは、現代世界や現在の諸事件を理解しないているには、あまりに現実的な理想です。そして、その信奉者たちがある方法、あるいは別の方法で、それらの諸事件に対して行なっている参加は、明白なものです。

そして、アナキズムがその行動に与えているはずの方向や、そのために用いなければならない手段を考慮しないているためには……」

「そうあってほしい。しかし、あなたは、モスクワで、マライア・ドミトロフカに本拠を構えていたアナキストたちとは、まったく似ていない」とスヴェルドロフは私にいった。そして彼は、そのことについて何かしらを付け加えていおうとした。しかし、私はそれをさえぎった。

「あなたの党による、マライア・ドミトロフカのアナキストたちの粉砕は、革命の利益のために将来は避けなければならぬ、痛ましいことだと見なされなければなりません……」

スヴェルドロフは、ひげの中で何事かつぶやいていった。そして、椅子を立て、私に近づき、手を私の両肩において、私にいった。

「あなたは、われわれのウクライナからの退却の時行なわれたこと、特に農民の精神状態に非常に明るい、と思う。イリツチ、われわれの同志レーニン、あなたの話を聞くことをきつと喜ぶだろう。彼に電話をしてもいいかね」

私は、これ以上もう多くを同志レーニンにいうことはできないだろう、と答えた。しかしスヴェルドロフはすでに電話をとりあげ、南ロシアの農民について、ドイツ侵入軍に対する彼らの感情について、きわめて重要な情

報を持って居る同志がここにいる、とレーニンに知らせた。そして即座に、彼は、いつ私に会うことができるか、とレーニンに聞いた。

一瞬ののち、スヴェルドロフは電話をおき、私に再訪を許す通行証を自分で作った。それを私に渡しながら、彼はいった。

「明日、午後一時に、直接ここに来て下さい。いっしょに同志レーニンの所にいきましょう……。あなたをあてにできますか？」

「ご期待に添います」と私は答えた。

レーニンと私の会話

翌日、一時に、私は改めてクレムリンにゆき、そこで同志スヴェルドロフにまた会った。彼は、ただちに私をレーニンの所に伴った。レーニンは、私を兄弟のように迎えた。彼は私の腕をとり、もう一方の手で私の肩を優しく叩いた。彼は、私に椅子に坐らせた。もう一つの椅子に坐るようスヴェルドロフに頼んでから、彼は書記に近づいていった。

「この仕事を二時までに終わてくれないか」

それから、彼は、私の正面に来て坐り、私に質問を始めた。

その最初の質問は、「あなたはどの地方からきたのか」であった。次は、「地方の農民たちは、すべての権力を村のソヴェトに、というスローガンをどう受けとつ

ているか、このスローガンの敵の反応、特に中央リーダーの反応はどんなものか」。さらに「あなたの地方の農民たちは、オーストリア・ドイツの侵略者に対して起ち上がったのか。もしそうなら、農民の反乱が全般的な蜂起に移り、多くの勇気をもってわれわれの革命的獲得物を守っている、赤衛軍部隊の行動と提携するのに、欠けているものは何なのか」

これらすべての質問に対し、私はレーニンに簡潔な答えを与えた。彼は、彼独自のものである才能をもって、私が一点一点答えることができるよう質問をするように努めていた。たとえば、こんな質問である。「あなたの地方の農民たちが、すべての権力を村のソヴェトというスローガンをどう受けとっているか」と、レーニンは私に、三度くり返して聞いた。彼は、私がこう答えたので驚いていた。「農民たちは彼らのやり方でそれを受けとっています。つまり、彼らの理解の中では、すべての権力は、あらゆる領域において、労働者たちの良識と意志とに一致しなければなりません。村の、郡の、県の、労働者農民代表のソヴェトは、ブルジョアジーとその従僕ども、すなわち、右翼の社会主義者とその連立政府、に対して闘っている、労働者の経済的自治管理と革命組織の機構以上でも以下でもありません」

「われわれのスローガンのその理解の仕方は正しい、とあなたは考えているかね」とレーニンは聞いた。「そうです」と私は答えた。

「この場合、あなたの地方の農民たちはアナキズムの洗礼を受けている」と彼は私にいった。

「それは悪いことですか」と私は聞いた。

「私がいいたいのはそういうことではない。反対に、それを喜ばねばならないだろう。なぜならそれは、資本主義とその権力に対する共産主義の勝利を促進するだろうから」

「それは私へのお世辞です」と私は、笑うのをこらえながらレーニンにいった。

「いやいや、農民大衆の生活の中でのこの社会現象は、資本主義に対する共産主義の勝利を促進する、と私はごくまじめに主張する」とレーニンはくり返した。そして付け加えた。「しかし、私は、その現象は自然発生的なものではない、と考える。それは、アナキズムの宣伝の効果だし、間もなく消滅するだろう。それに、組織を作りだす時間を持つ前に、勝ち誇っている反革命に攻撃された、その精神状態は、すでに消滅した、と私は思いがちな」

私はレーニンに、政治的指導者は、悲観的な、ないしは懐疑的な姿を示すべきではない、と指摘した。

「では、あなたによれば」とスヴェルドロフが私をささげりながらいった。「農民大衆の生活の中でのそうしたアナキズムの傾向を助長すべきなんだね」

「おお！ あなたの方の党はそれを助長しないだろう」と私は答えた。

レーニンは好機をつかんだ。

「なぜそれを助長しなければならないのだろう。プロレタリアートの革命的勢力を分裂させ、反革命に道を開き、要するに、プロレタリアートとともにわれわれ自身が、処刑台に登るため、かね」

私は自制ができなかった。神経質な声で私は、アナキズムとアナキストたちは、反革命を望んではないし、プロレタリアートをそこに導きもしない、とレーニンに指摘した。

「それが本当に私のいったことかね」とレーニンは私にたずねた。そして付け加えていった。「私は、大衆の組織を欠いているアナキストたちは、プロレタリアートと貧農たちを組織できない、したがって、われわれ皆が獲得したものを、われわれにとって貴重なものを、言葉の広い意味で、防衛するために彼らを蜂起させることもできない、といたかったのだ」

対話はそれから、レーニンがだしたほかの質問に移った。それらの一つ、「赤衛軍の部隊と、勇気を持ってその部隊がわれわれの共通の獲得物を守った」ことについて、レーニンは私に、できるだけ、また完全に答えることを強いた。明らかに質問は、赤衛軍の編制が最近ウクライナにおいても完成し、レーニンとその党が決めた目標に、いわゆる成功裡に到達したこと、それらの部隊は、レーニンとその党の名において、ペトログラードやそのほかの遠いロシアの大都市から派遣されたことを、

彼に気にかけてやるか、あるいは思いださせていた。私は、レーニンの心の動き、憎み・打ち勝とうとする社会秩序に対する闘争を情熱的に行なっている男の中にしか現れない心の動きを、思い起こす。それは、私がこういった時のことであった。

「一九一七年十二月末と一九一八年の初めに、ドイツ戦線から退却した十人ばかりのコサック騎兵の武装解除に加わった私は、赤軍の部隊の、特にそれらの隊長たちの、《革命的勇敢さ》についてよく知っています。ところで、同志レーニン、二重三重の間接的な情報にもついているあなた、あなたはそれを誇張しておられる、と私には思われます」

「それがどうなんだね。あなたはそれに異議を申し立てるのかね」とレーニンは私に聞いた。

「赤衛軍の部隊は、革命的精神と勇気を持っていることを示しました。しかし、あなたがいわれたほどにはありません。中央ラーダの《ヘイダマークス》に対する、特にドイツ軍に対する、赤衛軍の闘いには、赤衛軍とその隊長たちの革命精神や勇気が、また行動が、きわめて弱かったことを暴露した時期がいくつかあったのです。確かに、私によればそれは、多くの場合、赤衛軍の分遣隊が急造されたものであり、敵に対して、バルチザン・グループのものにも、正規軍のものにも似ていない戦術を用いねばならなかった、という事情のせいでした。あなたは、赤衛軍は、それが多数であるにせよそうでない

にせよ、鉄道線路上を移動しながら、敵に対して攻撃を行なったことを、知らなければなりません。鉄道線路の脇の、十ないし十五キロばかりは、土地は占領されなかったのです。革命の、あるいは反革命の擁護者たちは、そこを自由に往来することができました。そのために、奇襲攻撃は、ほとんどたえずうまくゆきました。赤衛軍の部隊が、戦線を組織し、そこから攻撃に打って出るの、鉄道の連絡点や、鉄道の通ずる都市や町の近辺でしかありませんでした。

しかし、敵に脅かされている地区の背後やすぐ近くは、擁護者もいままに残されました。革命の攻撃行動は、その反動を蒙りました。赤衛軍の部隊は、反革命軍が反撃に移り、実にしばしば、赤衛軍にまた装甲列車の中に退却することを強いた地方では、彼らのアッピールをほとんど撒けずに終ったのです。そのため、農村の住民たちは、それを見ませんでした。以後、それを支持することもできませんでした」

「農村での革命宣伝員たちは何をしていたのかね？　では彼らは、近所を通過する赤衛軍部隊を新手段として補うよう、あるいは、赤衛軍の正規の新しい部隊を形成し、反革命と闘うための立場に立つよう、農村のプロレタリアたちに準備させるにもいたらなかったのだね」とレーニンは私にたずねた。

「興奮しないようにしましょう。革命宣伝員は、農村には多くはおりませんし、大したことはできません。とこ

ろで、村々には、毎日、革命の密かな敵の、何百人という宣伝員がやってきました。多くの地区では、革命宣伝員が革命の新しい力を生みだし、反革命と敵対するためにそれを組織することを、当てにしてはなりません。われわれの時代は」と私はレーニンにいった。「すべての革命家の決定的な行動、労働者の生活と闘争とのあらゆる領域でのそれを、要求しています。特にわれわれの所では、ウクライナでは、それを考慮しないこと、それは、コサック首長の下に集まっている反革命に、好き勝手に発展すること、その力を強固にすること、を許すことです」

スヴェルドロフは、私にもレーニンにも眼をやりながら、満足げに微笑していた。レーニンについていえば、彼は、指を組み合わせ、頭を傾け、熟考していた。頭を挙げると、彼は私にいった。

「あなたが私にいったばかりのことすべては、まことに残念なことだ。そして、スヴェルドロフの方を向いて、付け加えていった。「赤衛軍を赤軍の中で立て直しながら、われわれは、正しい路線、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの決定的な勝利へと向かう路線を進んでいる」

「ええ、ええ」とスヴェルドロフは、急いでいった。

レーニンは、私にさらにいった。

「どんな仕事を、あなたはモスクワでするつもりなのかね？」

私は「ここには長くない」と答えた。「タガンロークで開かれたバルチザン諸グループの会議の決定にしたがって、私は七月初めにウクライナに帰ってなければなりません」

「秘密裡に？」とレーニンは私に聞いた。

「ええ」と私は答えた。そこでレーニンはスヴェルドロフに話しかけて、こんな反省をした。

「アナキストたちは、いつもきわめて献身的だ。彼らは、すべてを犠牲にする覚悟でいる。しかし、無分別な狂信者だ。彼らは、はるかな未来をしか考えないので、現在を知らない」

そして、私のことをいっていると思わぬようにと私に願いながら、彼は付け加えた。

「私はあなたを、同志よ、われわれの時代の現実と必要の感覚を持った人間だと思う。もしロシアに、あなたのようなアナキストが三分の一もいたとしたら、われわれ共産主義者たちは、ある条件の下で、彼らとともに歩み、生産者たちの自由な組織の利益のために共同で仕事をしよう決意しただろうに」

この時、私は、私の中に、レーニンへの深い尊敬の思いが湧き起こるのを感じた。それまではまだ、私は、彼が、モスクワでのアナキスト組織の絶滅、他の多くの都市でのアナキスト組織粉砕の合図となったものの、責任者であると確信していたのに。そして、心中で私は、私

自身を恥じた。私がレーニンになすべき返答を探しながら、私は彼にきっぱりといった。

「革命とその獲得物は、無政府共産主義者たちにとって高くつきました。この観点から見れば、彼らはみな似ている、というのが、その証拠です」

「おお、われわれにそれをいわないでほしい」とレーニンは笑いながら反駁した。「われわれは、あなたのようなアナキストたちを知っている。しかし大概は、彼らはいかなる現在の観念も持っていないか、ともかく、ごくわずかしが現在の観念にかけない。ところで、現在、それについて考えないこと、ないしは、それに対して積極的な形で態度を決めないことは、革命家にとって恥ずべきというよりもっと重大なことだ。アナキストの大部分は、未来に向けた思想を持っているし、現在を理解しようとするだけでなく、彼らの著作を未来にささげている。そのことがまた、彼らからわれわれを引き離している」

そういって、レーニンは椅子から立ち上がり、右から左へと歩いた。彼は付け加えていった。

「そうだ、そうだ、アナキストたちは、彼らが未来について考えた思想によって強力だ。現在の中では、彼らは地に足がついていない。彼らの態度は哀れむべきものだ。というも、内容のない彼らの狂信が、彼らが未来と実際の結びつきを持たなくさせているのだから」

スヴェルドロフは、皮肉な微笑を見せていた。そし

て、私の方に向きながら、彼はいった。

「あなたは、それを否定はできない。ウラジミール・イリツチの熟慮した考えは正しい」

「アナキストたちは、《現在の》生活の中の現実主義の欠如を、かつて認めたことはないのだろうか？ 彼らは、それを考えずらなかつた」と、レーニンは急いで付け加えた。

それに答えながら、私はレーニンとスヴェルドロフに、私は半文盲の農民だ、私はレーニンがアナキストたちについていった、私には学問的すぎる意見を討論しようとは思わない、といった。

「しかし、同志レーニン、私はあなたに、あなたの断言、つまり、アナキストたちは《現在》を理解しない、彼らはそれとの実際の結びつきを持たない、等々は、根本的に誤っている、といわねばなりません。ウクライナの（あるいは、《南ロシア》の、というも、あなた方、ポリシェヴィキ共産主義者たち、あなた方はウクライナという言葉避けようとされるから）無政府共産主義者たちは」と私はいった。「彼らが難なく《現在》の中にいるという数多くの証拠をすでに提出しています。中央ラーダに対するウクライナの革命の戦場の下に進み、無政府共産主義者のイデオロギー的指導の下に進められました。そして部分的には社会革命党員たちによって（もつとも、実をいえば彼らは、ラーダに対する闘いに、われわれ、無政府共産主義者のものとは、まった

く別の目標を与えていました。あなたのポリシェヴィキたちは、われわれの戦場には、いわば存在していないのです。あるいは、彼らがいるとしても、その影響力はごくごくわずかなものです。ウクライナの農民の、ほとんどすべてのコミューンないし提携組織は、無政府共産主義者の扇動の下に形成されました。反革命全般との、オーストリア・ハンガリーとドイツの侵入軍という形をとった反革命との、勤労民衆の武器を手にした闘いは、無政府共産主義者のみの、イデオロギー的、組織的指導の下で企てられました。確かに、それらすべてをわれわれの貸方とすることは、あなたの党の利益ではありません。しかしそれは、あなたが否定することのできない事実です。あなたは、ウクライナの革命非正規軍の兵力と戦闘能力とを完全にご存じだ、と私は推測します。彼らがわれわれの共同の革命の獲得物を英雄的に守った勇氣を、あなたが思いださせたこと、それは理由のないことではありません。

彼らの間で、半ば以上がアナキストの旗の下に闘いました。モクルソフ、M・ニキホローヴァ、チエレディヤーク、ガリン、チエルニヤーク、ルーネフ、その他列挙するにはあまりに長すぎる正規軍の指揮官たちは、すべて無政府共産主義者たちでした。私は、私についてや、私が属していたグループや、赤衛軍の指揮と無縁ではいらなかつた、われわれが作った、革命の擁護のための《志願兵部隊》や、その他すべてのバルチザン・グ

ループについては、お話ししません。これらすべては、同志レーニン、どの点でも十分な力をもって、あなたの主張、つまり、われわれ無政府共産主義者が足を地につけていない、われわれは《未来》を考えることをずっと好んでいるのに、《現在》の中のわれわれの態度は、哀れむべきものだ、ということが、誤っていることを示しています。われわれの会話の中で私があなたにいったこと、それは疑いえないことです。なぜなら、それは真実だからです。私があなたに対して述べたことは、あなたがわれわれについていった結論に反します。あなたが含む誰でもが、そこに、われわれは難なく《現在》の中にいること、われわれは現在の中で、事実、われわれがきわめて本気に考えている未来にわれわれを近づけるものを、現在の中に探しながら、活動していることの証拠を見る、ことができます」

この時、私は、スヴェルドロフを見つめた。彼は赤くしたが、私に微笑みつつづけていた。レーニンはいえは、彼は、手をひるげながらいった。

「私が間違ってもありうる」

「ええ、ええ、同志レーニン、今のところ、あなたは、われわれ無政府共産主義者たちにあまりに敵しすぎました。それはひとえに、あなたがウクライナの現実や、われわれがそこで果たしている役割について、よく知っていないからだ、と私は思います」

「おそろく、私はそれを否定できない。特にわれわれが

おかれている状況の中では、誰が誤りを避けていられよう」とレーニンが答えた。

私がやや神経質になったのをさすると、彼は、たいへん巧みに会話を別のテーマに逸らしながら、父親のように私を落ち着かせようとした。しかし、そういつてよければ、私の悪い性格が、われわれの会話中に私がレーニンに対して抱いたあらゆる尊敬にも反して、これ以上彼に好意を寄せることを私に許さなかった。私は侮辱されたと感じていた。そして、彼とともに多くのテーマに取り組むべき、あるいは、彼から多くのものを学ぶべき、そういう人物が私の前にいる、と感じながらも、私の気持は悪化していた。私の返答は、もはや和らがなかった。私の中で何かしらが碎かれ、苦しい感情が私を侵した。

レーニンは、私の感情の中でこの変化に気づかないでいることはできなかった。彼は、ほかのことを話しながら、それを鎮めようと努めた。そして、私の気持がよい方向に戻り、私が彼の雄弁に引きとめられた、と見ると、彼は突然私に聞いた。

「ところであなたはウクライナに秘密裡に帰るつもりなんだね」

「ええ」と私は答えた。

「あなたを手助けすることができるかな」

「ありがたいですね」と私はいった。

そして、スヴェルドロフに向かって、レーニンはたず

ねた。

「われわれのところ、今誰が、われわれの仲間を南にゆかせることの担当部門の長なのかね？」

「同志カルベンコかザトウスキでしょう」とスヴェルドロフはいった。「問い合わせてみましょう」

スヴェルドロフが、ザトウスキがカルベンコのどちらが、秘密に活動するためにウクライナに活動家たちをゆかせる、担当部門の長なのかを知るために電話している間、レーニンは、アナキストたちに対する共産党の立場は、私が考えているほど敵意を含んだものではないと、私に関する彼の態度から結論しなければならぬ、と納得させようと試みた。

「われわれが」と、レーニンはいった。「彼らがマライア・ドミトロフカに持っていた、そこにその地区の、あるいは通りすがりの、いく人かの無頼の徒を隠していた、特殊なホテルのアナキストたちを立ち退かせるために、徹底的な手段をとらなければならなかったとしても、その責任はわれわれに帰せられるものではない。そうではなく、そこにいたアナキストたちの責任だ。ほかでは、われわれはもう彼らを気に病むことはあるまい。あなたは、彼らはマライア・ドミトロフカから遠くない、別のアパートに住むことを許されていて、彼らは彼らが望んでいるように働くことも自由であることを、知らなくてはならない」

「あなたは」と私は同志レーニンに聞いた。「マライア・

ドミトロフカのアナキストたちが無頼の徒を宿泊させていた、証拠を持っているのですか？」

「いかにも、特別委員会「チェカー」が、それを集め、立証した。そうでなければ、われわれの党は、処置を講ずることを許さなかつたらう」とレーニンは答えた。

その間に、スヴェルドロフが戻ってきて、われわれとともに坐った。そして彼は、同志カルベンコが通行を扱っている部門の長であること、しかし同志ザトウスキもまたすべてをよく知っていること、を告げた。

レーニンはただちに叫んだ。

「よろしい。同志よ、明日、明後日、あるいは、あなたの都合のいい時に、同志カルペンコの所に寄りたまえ。そして、あなたが秘密裡にウクライナに帰るために必要なことすべてを、彼に要求したまえ。彼は、国境を横切るための確実な道順をあなたに教えるだらう」

「どの国境です」と私は聞いた。

「あなたはよく知らないのか。国境がロシアとウクライナの間を設定されている。それを守っているのはドイツ軍だ」といらいらしてレーニンがいった。

「しかしあなたは、ウクライナを『南ロシア』と見なし

ているのではないですか」と私は答えた。

「同志よ、見なすということと、生活の中で注意深い眼を持つことは別のことだ」とレーニンは反駁した。

そして、私に言い返すいとまを与えず、彼は付け加えていった。

「同志カルベンコに、あなたをいかせたのは私だ、といいなさい。もし彼が疑ったら、彼は私に電話するだらう。ほら、このアドレスであなたは彼に会うことができる」

三人とも立ち上がると、われわれは握手を交した。そして、明らかに心からの謝意の交換ののち、私はレーニンの事務室を出た。